
夢願堂

土方 隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢願堂

【Nコード】

N5425T

【作者名】

土方 隼人

【あらすじ】

あなたは……何を思い、何を願いますか？

かなえない望み、誰にでもあるでしょう？

“そこ”へ行けば何でも叶う

“そこ”へ行けばなんでも手に入る

たった一つの

強大な

“代償”と引き換えに……

真っ暗闇の中に立つ、一人の人物。

その人物は、黒髪で細身。そして背が高い少女だ。

彼女は私だ。

私の周りでたくさんの声が聞こえる。男の声も、女の声も……た
くさんの声が。

私を苦しめ、辱め、そうして楽しむ……屈託無く、そして、狂っ
た……笑い声。

脳裏に浮かぶ映像は、私の日々。

苦痛と恐怖と絶望に染め上げられた……地獄の日々。

殴られ蹴られ辱められ、毎日毎日、たくさんの紅^{アカ}を流し、紅^{アカ}を吐
いて、苦しくて、辛くて……何度も死にそうになった、死にたいと
思った……

でも……

死を選ぶのは私が弱いからだ。

アイツらから逃げる為、逃げるなんて……絶対に嫌だ。負けるの
は本当に嫌い、我慢ならまだ出来る、痛みなら辛いけど堪えられる、
暴力なんて……嫌いだ。

だけど、

やられっぱなしは……

もう……嫌なんだ。

嗚呼、私はそうして叫ぶんだ。

助けて。

誰か……助けて、と。

今日もいつものように目覚めたら、自身のベットの上だった。
体がつらいし、昨日付けられた傷もまだ癒えていない。

「……辛いけど、それでも、行かないと。行かなきゃ駄目だ。」

自分にそう言い聞かせて体を起こす。

そう、いくら辛くても学校へ行かなければならない。行かなければ、義父と義母が黙っていないだろう。きっと殴られて蹴られて……夜眠れなくなるだろう。

それだけは避けたい。眠らなきゃ、生きていけない。

そのくらい気持ちをかき消すようにカーテンを勢いよく開けた。

外は晴天。

雲ひとつない日本晴れ。

私の心とはまるで正反対だ。

「……」

さっさと制服に着替えた。

一応リビングへ義母と義父に顔を見せに行く。おそらくそこへ行っても、私の朝ごはんは用意されていないだろう。

でも、一応あの人たちに顔ぐらいは見せないと、後で何を言われるか……。

リビングに顔を出すと義父と義母がこちらを睨み付けてきた。

「ああ、おねえちゃん」

たしか今年で3歳になる義妹が手いもうとを振る。この子は何も知らない。知らなくて良いと私は思う。この子は悪くないのだから。

確かこの子が生まれてから虐待が始まった。だからって私はこの子は恨んでいないし、死んでほしいなんて思わない。この子が居なくなっただって、この生活が変わるわけじゃないもの。

実際悪いのは、義母と義父だ。私のお父さんとお母さんの遺産目当てで私を引き取って、ここまで育ててくれたことには感謝してるけど自分の子供が生まれたら手の平返してきて……

——サイアク

今日も登校道をとぼとぼと歩いていた。

たまに会う同じ学校の人たちは私を見つけると、ヒソヒソと陰口を始める。

——ウザイ

根も葉もない……噂。

『知ってる？あの子、B組の中条だよ。』
ナカジョウ

『あゝ知ってる。イジメやってる子だよね。』

『生きてる価値なんかないよね。』

『ふふふ、いえてるうゝ。』

そんな言葉が聞こえる。

——チガウ

『あ、知ってる？この噂！』

『え？どんな？？』

『あいつの親、死んだのはあいつが殺したからだって！』

『うそ！？マジそれ？』

——チガウ

『友達のもの盗んだりしててえゝ。』

『わ、サイアク！』

——チガウチガウチガウ！

『人殺しだってえ！』

『こわあ！』

——チガウ！

『人殺し！』

『生きてる価値なんかない。』

——私ハ ソンナコト シテイナイ

いつも聞こえる声。

言い返さない私。

つくづくイヤになる。

「ゝでさ、あいつ」

「……は……でえ」

「あ、」

途切れ途切れに聞こえてくる、不必要にでかい声で交わされている言葉は私が教室に入った瞬間ぴたりととまる。

2、3秒静寂が続き、ひそひそとした声が聞こえる。

私は自分の机を見た。

——マタダ

花瓶が置かれている。菊の花。

——誰ダヨ

こんな手の込んだ悪戯して、さぞかし暇人なんだろうな。それに菊って……葬式じゃないんだから……

——縁起 悪スギ

私は無言でそれを元あった所（花瓶をもともと置いていたところ）へおいた。

再び机に眼を向ける。

『死ネ!!』

ナカジョウナンカ

生キテルカチナシ!!

ジゴクオチロ!!』

カッターか何かなかで書かれたのだろうか。深くないがその文字は太い。これ書くのに使ったカッターはさぞかし刃こぼれしただろうよ。

ほとんどカタカナ。

——モウ少シ 漢字ヲ勉強シロヨ

前の国語のテストで赤点取った私も人の事いえないけどさ。

今日下敷きもって来たかな？

先生に頼んで新しい机用意してもらうかな？

でも用意してくれる可能性は

——限りナクゼロニ等シイ

小さくため息をつく。

——バカバカシイ!

席についてカバンから教科書を机の中に入れる。

（あー眠い）

昨日は途中で学校サボったのがばれてほとんど寝てなかった。

少しずつ意識が遠のく

が、

「あ、あの！御幸！」ミユキ

この声で眠れなかった。

けだるげに顔を上げると案の定、あいつが居た。

背が低く、童顔で青白い肌。髪は耳のしたあたりで二つに縛った少女。

あたしの最も嫌悪する相手。

神埼 メイ

「あ、あの、これ、頼まれていたお金です。バイトの給料日が変わっちゃって……それで、遅れちゃって……ゴメンナサイ！」

……なにやってんだよ

そんなこと誰も頼んでないし。

「ちよっと！何やってんだよ！中条！」

あゝあ、馬鹿な奴が来ちゃったよ。

「そうだよ！体悪いメイにバイトさせてさ！」

……いや、誰もそんなことさせてませんけど。

だんだんこちらに男女問わず生徒が集まってくる。

「あんた最低だよな。神埼をいじめて」

馬鹿な男子生徒の言葉。

何度目だろうか？いい加減数えるのもバカバカしい。

「み、みんな止めて……グスン。」

ああ、うざい。こいつの嘘泣きかなりウザイ。

毎回、毎回、毎回、毎回、まったく同じパターン。

「……私、お金なんて頼んでない」

「はあ！？嘘つくくんじゃねえよ。」

「いつもいつも体悪い神埼さんにバイトさせているくせに！」

「最低野郎の癖に！嘘ってバレバレなんだよ。」

いや、私嘘なんかついてないし。

「死ね！最低野郎」

痛いなあ、もう。

ホント金属バットで殴りますか？

それに、最低なのは背後からバットで殴っているあんたたちの方でしょ？

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

「み、みんな止めて！」

嘘泣きウザイ。みんな気付かないの？

笑ツテイル

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」
「死ね！」

何度も何度も殴られ、蹴られ……

「……そんな……こ……として……たの……しい？」

次に私の口から出たのは血ではなく、か細い……声。

「ひと……を、……き……ずつけ……て、……、あん……た、たち……
……たの……しい？」

きつと……こんなことを言ったって、助けてはもらえないだろう。
それでも……縋ってしまおう。助けてもらえないとわかっている。わ
かっているでも縋ってしまおう。

——ソレガ人間

——人間ノ哀シイ習性

「何言ってるの??」

「ばっかじゃないの??」

「お前なんて殴られて当然」

「ってか、人のこと傷つけてんのアンタじゃん！」

「ま、あたしらも楽しいからやってんだけど」

「ははは」

また、私を殴ったり、蹴ったりし始めた。

最低なのはどっちだよ！

本当に最低なのはあんた等の陰に隠れて……嘘泣きして、私を嘲
笑っている、メイだよ！皆、気付けよ！あいつ、笑っているんだ。

私のこと、皆のこと、ずっと嘲笑い続けているんだ。

「ごふっ」

口の中に鉄臭い、どろりと生暖かいものがあふれ、それが床を汚
した。

紅く……

プツン——

そこで私の意識は途切れた。

真っ暗い、闇。

手をかざしても何も見えない。

いったいここは……

——……

そうだ、あの時気絶して……

眼を、覚まさないや。

……………!

眼を開けたらそこは保健室のベット。

あいつらに付けられた大小の傷は絆創膏ばんそうこうやガーゼ、包帯などで隠されている。

こんなのはあいつらに暴力を振るわれるようになってからは初めてだ。

いつも気絶したらそのままどこかへほったらかしだった。

大体が掃除用具のロッカーに閉じ込められていた。

でも一体誰が……

起き上がってみると全身に鈍い痛みが広がった。

「あ、眼、覚ましたんだ。よかったあ」

起き上がったとき、その気配で気付いたのか、カーテンが開きそこから中等部の制服を着た少女が現れた。

「キズだらけで倒れているから心配しちゃって。」

おそらくこの子は私の噂を知らないで助けた。でも、私より背も低く、小柄な彼女はどうかやって私をここまで運んだのだろうか？ 高等部の私の教室は4階の一番東で、この保健室は別の棟の1階の西から二番目だ。一体どうやって？

「ねえ、起き上がって大丈夫？」

「……あ、うん。ありがとう」

優しい娘だ。思わず涙があふれそうになったがぐっとこらえた。

彼女はカーテンを大きく開けると一つに束ねた。

すると保健室ほぼ全体を見渡すことができる。だからさっきまで見えなかったモノが見えた。

彼女のほかに中等部の男子生徒が一人居た。

おそらく彼がここまであたしを運んだのだろう。

「……起きたんだ。」

綺麗な人だな。

なんとなく思う。

髪は脱色しているのか——脱色であそこまで綺麗になるか分からないけど——生まれつきかわからないが色素が薄い。それに少し変わった色の眼をしている。左が青っぽい紫色で右が金色だ。それに、彼の瞳は、此の世のものではない“何か”を見ているようだ。おもわず見とれていると、

「……珍しいと……思っている……？」

彼はいきなり口を開いた。

確かにそう思った。

「ははは、叶夢は色々変わってるもん。珍しがられるのはいつものことだもんね」

「月音、……黙っている。」

「はい。」

無表情に叶夢と言われた少年は月音と言われた少女を見ると立ち上がり、こちらに背を向けた。教室に帰るのかな？

「悩んでいることが……ある？」

「え！？」

叶夢はまるで私の心を読んだように言った。

彼の声はぼそぼそとした、普段ならとても聞き取りにくい声だが、なぜか彼の声は私の耳、そして脳へと鮮明に響いた。

「な、んで？……」

「何で分かるか……そう、……聞きたい？」

こちらからは彼の表情は見えない。

——コイツ、何者？

「……俺が、……何者かは、あんたが、決めること……。」

「！？」

やっぱり、私の心を読んでいる！？

キーン コーン コーン カーン コーン

どこか間の抜けたチャイムが鳴る。

『下校時間になりました。用事の無い生徒は下校しましょう。』

「……もう、下校か。……立てるか？」

叶夢は振り返ると、私に手を差し出した。

……そういえば今日は午前中授業だった。

そう考えながら私は彼の手につかまり立ち上がった。

まだ少し痛むけど、立てないことは無かった。

「……もし、何か……知りたければ……この店に……来るといい。」

そう言って叶夢は何か、紙切れをポケットから出して渡した。

「……これは？ なんなの？？」

「招待状、かな？」

紙を受け取ったその時、薄っすら、甘い香りがしたような気がする。

あの後、どうやって帰ったか覚えていない。

気がついたら家の前にいた。

足の痛みはもう気にならなくなっている。

「ただいま……」

感情の無い声が口から出る。

「あ！ おねえちゃん！！ おかえりい」

たたた、と危なっかしく、妹が駆けて来た。

裏表の無い笑顔。

これのおかげで私は随分救われた。

階段を上がり、自分の部屋にもどる。

制服の上着を脱ぐとき何かポケットから落ちた。

「あ、」

さっき、叶夢からもらった紙。

そこに書いてあったのは……

『夢願堂（むがんどう）あなたの願い、かなえます』

人気商品 ……

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

TEL○○・○○○○』

「ムガンドウ??」

人気商品というところを読んでもみると、よく分からない商品の名前が書いてあった。

下の方をみるとそこには地図が書いてある。

「案外近いんだ。」

———

だまされたと思って行ってみることにした。
まだ幾らか小遣いが残っている筈だ。

地図のとおりに行ってみるとそこには、木でできた古ぼけた店があった。

店の看板には筆で書いたような文字ででかかど『堂 願 夢』と書かれていた。

文字が右から左に書かれているってことはかなり昔からそこにあることになる。

「……何年前のだろう。」

恐る恐る、店のガラス窓から中をうかがう。

案外広いようだ。

「あ！」

「きゃ！」

いきなり大きな声がし、驚いて裏返った声を上げてしまった。
後ろを向くとそこには月音がいた。

「中条さん、待ってました。」

そういつて彼女は私の腕をつかむと、店内に連れて行った。
(ちよっとちよっと、どーなってるのよお！何で私の名前してる

の!!)」

——イッタイ コノコ達ハ 何者

店の中に入るとそこには『夢願堂』と書かれた紺と藍色の間ぐらの色のいかにもアルバイトといった感じのエプロンを付けた、叶夢がいた。

中学生がバイトしているのかよ……。

「……中条さん、なにを……願いますか？」

——エ？

「かなえない望み……あるでしょう？」

一体、なにを言っているのこの……

叶夢は戸棚から一つの小さな箱を取り出した。

「……この中に……入っているのは、“ネツアクのカード”」

「ネツアク？」

「そう、ネツアク。」

「……どういう意味なの？」

そう聞くと叶夢は、意味ありげな笑みを浮かべて「さあ？」と、答えた。

あの顔は絶対意味を知っている顔だ。

むっとしたのが表情に出たのか、叶夢は「そう怒らないで」と言う話を続ける

「……まあ、……簡単に言えば……これは貴女の『願い』を……叶える力がある。」

……ねがいをかなえる？

(一体、どういうこと?? ……そんなこと、あるわけ……)

「……信じて……いないみたい、ですね。……別に、いいけれど……それでも。」

「……ほんとに、ねがいを？」

「……この中に、入っているカードを破ればいい。……一枚破れば、……あなたの願いが一つだけ、……叶う。」

私は手渡された箱の中身を見た。

入っているのは色とりどりのカード。

(……こんなんで、本当に願いが叶うのかな?)

まじまじと見ている私に叶夢は思い出したように口を開く。

「……言い忘れてたけど、願いをかなえたら、貴女から……一つ、代償をもらおう。」

「だい……しよう?」

「……そう。それは……お金やモノではない。貴女の記憶、心……他にも、ありますね……たくさん。……命を奪われた人も……。」

「私は何をとられるの?」

「さあ?……でも、気をつけたほうがいい。……大き過ぎる欲望は……身を滅ぼす。」

「願いをかなえる……か。」

実際あまり信じてはいない。

『命を奪われた人も……』

『多すぎる欲望は身を滅ぼす』

叶夢の言葉がよみがえる。

「私は……」

どうせ、失うものはありはしない!

それより私は……

「メイに……勝ちたい!!」

私は一枚カードを破った。

「……でさ、あいつ」

「……は……でえ」

「ねえねえ、……って、しってるう?」

いつもの日常、いつもの教室。

「あ、」

一人の生徒が視線を教室の扉に移す

「中条だ。」

「あいつ、まだ学校来んの？」

「むかつく。」

口々にそんな言葉が出てくる。

「人殺しの癖に……」

一人の生徒がそういった。

次の瞬間

「私は人殺しじゃない!!」

私はそう言っていた。

「人殺しに人殺しといって何が悪い!この最低女!!」

「私は殺していない!あれは事故よ!」

「……!」

私のあまりの剣幕に、彼女は一步後ずさる。

私自身、驚いている。

「あ、あの!御幸!」

きた。

アイツ……メイだ

「こ、このお金……」

「私はそんなの頼んでいない!!」

「……!!」

「毎回毎回、根も葉も無い噂流して……そんなに人を傷つけて楽しい?」

「……え!?!……私はそんなこと……」

「……自分の手は汚さず、仲間を騙して利用する、……人の陰で私やこの人たちを嘲笑って、……何かあれば嘘泣きをし、病さえ武器にして、同情を買おうとする……、あんたは!……あんたは、一体何がしたいの!?!何がそんなに楽しいの!?!」

自分でもびっくりするくらいすらすると言葉が出てくる。

「な、なんだよ!メイがそんなことする筈ねえじゃんか!」

「ほんっと、あんたは最低だね!」

周りから非難の声……

「うるさい！あんたら、ちょっと黙ってろ！こっちはメイと話してんだよ！！」

また、だ。

驚くくらい言おうと思っていた言葉がすらすらと出てくる。

今まで、心のどこかで私の言葉なんか誰も信じてくれないという“怯え”があった。

なのに、その“怯え”が無くなり、今は言おうと思っていた言葉が出てくる。

「メイ……あんたはバイトもなにもやっていない。……病弱なの……もう直ったでしょ？病を武器にして……みんなの気を引いて……」
「な！！テメエ、なにを……」

「凶星？？」

一人の生徒の声をさえぎって私は低く、つぶやく。
しい……ん、とした静寂があたりを支配する。

すると……

「ふふふ、くくふふくふふ」

下を向いたまま、メイは笑っている。

「どうしたの？」

「メイ？」

メイは近づいてきた人達の手を振り払った

「うるさい、うるさい！！嫌いだ嫌いだ嫌いだ！！みんなみんな、大っ嫌い！！キライキライキライキライ……」

「どうしたの？メイ……」

「お、落ち着いて……」

いまだにメイは、狂ったように『キライ』と言い続けている
皆、メイに落ち着くように言っている。

「キライキライキライ！！……えらなんか……お前なんかもう要らない！！！！」

「メ……メイ？……あんた何言っ……」

「ばっかじゃないの？あんたたちなんて、皆なんてあたしのオモチ

ヤなのに」

メイは再び歪んだ……狂気にかられたような笑みを浮かべた。

「そうよ！御幸の言ったことは全部ほんとよ！体なんて悪くない！

……あはははっ、ほんとおうちに、ばあつかみたあい。……みんな、スカアーツとするほど、簡単にひっかかってくれたんだから……。御幸の透かした顔とかあ、真っ直ぐな眼とかあ、……。全部、ぜえんぶ、……。ぜえんぶ、気に入らなかったんだよねえ。……。だからさあ、ちょっとだけえ、いじめてえやっただあ。

な、なに言ってるの？

そんな理由で？

今まで……

「……でもお、さあ。……もお、ほんとお、……。飽きちゃったなあ。あんたらといんのお……。だからあ、ねえ……。？」

メイは再び、狂気の笑みを浮かべる。

「じゃっ、ばあいばあい」

そのまま、メイは教室を出て走り出した。

追いかけることもできたのに……

足が動かなかった。

他の、人たちも……。そう。

誰一人、彼女を追いかけることができず、メイのその後の行方は、分からなかった。

放課後……

なんだか、疲れたな。

謝ってくれる人がたくさん居た。

中には泣いていた人も居た。どうしていいかわからなくて……。

私、すごくオロオロしていたっけ……。

皆で先生やほかのクラスの子達の誤解を解こうとしてくれた。涙がでるくらい嬉しかったな。

もう一人じゃない。

でも、その前に……今やるべきことは

「まだ、銀行開いてる！」

両親の講座から遺産の一部を引き出す。

「これでよし！」

「……で、今までの水道代、学費、衣食住代……その他もろもろ全部あわせて、これくらいです。」

義母と義父は突然私の出した大金に眼を丸くしている。

「今まで育ててくれてありがとうございます！良かったです！だけど……だけど、私の両親の遺産は両親が私のために残してくれた遺産だから一円もあげられません！遺書にもそう書いてありました。……この家もあげます。でも、遺産は譲れません。」

私はまとめた衣類などの荷物、通帳などを持って立ち上がった。

私のもう一つ遣り残していたこと。……それは“独立”だ。

今まではそんな勇氣無かったけど、今ならなぜかできると思った。

「今まで、ありがとうございます。」

そういつて、家を出る。

もうここには用はない。

「ちょ、ちょっと、……それじゃ、どこに住むつも「しばらくはホテルに泊まって……それからアパートにでも引っ越します。」

義母の言葉をさえぎり、少し前から立てていたその後の計画を口にした。

義母はまた、慌てるように口を開く。

そんなに遺産がほしいのか！！

「で、でも、貴方みたいな子供が一人暮らしなんて……」

「そ、そうだ。確かにあぶ「もう子供じゃ、ありません！」

義母に同意した義父の言葉をさえぎって私は言った。

「……それに、あなた方の虐待にも耐えられません。」

「そ、それはあやま……」「これ以上引き止めるなら、裁判にでも出

るつもりですよ？」

また義母の言葉をさえぎって最終手段に出る。

「それでは、さっき言った通りなので、さようなら。」

私は家を出た。

すう、と胸が軽くなった気がした。

新しい一步を踏み出せた気がした。

時間が少しさかのぼって……

あの時、教室から出た後、あたしはどこか分からない道をただただひたすら走っていた。

キライキライキライキライ

キライキライキライキライ

キライキライキライキライ

皆、大っキライ。

「あいつら……ほんとむかつく。……なにもかも、あいつが……御幸が憎い!!」

ぶつぶつとつぶやきながらあたしは道を走っていた。

もう辺りが、ずいぶん暗くなっていたが、あたしには、もう……そんなことは、どうでもよかった。

ただただ、感じるのは外の寒さでも、ずっと走ってきた疲労感でもなく、御幸への、恨み。ただ、それだけだった。

「神崎メイ、か？」

突然声をかけられて後ろを振り返ると、中学生くらいの男の子が立っていた。

色素の薄い髪が月光に反射して銀色に輝いている。

夜の闇と少し眺めの前髪から顔はうかがえない。

「なに？」

「かなえたい……望み……あるでしょう？」

男の子に案内されてついたのは夢願堂という謎の店。

「なに？なんなの？？ココ……」

「手を……出してください。」

言われて、手を差し出すと男の子は数粒の紙に包まれた何かを差し出した

「ガラス玉？」

「……いや、水晶玉。『天魔波旬てんまはじゅんの水晶玉』という。それを……割れば、願いが叶う。」

「ほんとに！なんでも！！かなうの？？」

私は嬉々として聞いた。

男の子は、くすりと笑みを浮かべて、左右違う色の瞳を三日月のように細める。

「ああ、ただし、大きな……代償と……供に……ね。」

そう言っていたがあたしは……

「ねがいがかうならなにもいらない……ながいがかうのなら……」

そう言つて、すべてのガラス玉を砕いた。

瞬間、強い風が吹き、ザワザワと近くの木が不気味な音を立てた。辺りを見渡すと男の子の姿は無く、声だけが響いた。

「……これでは、……貴女は壊れる。壊れてしまう」

心配するような言葉とは裏腹に、その声は何の感情も持っていなかった。

「な……どういう事？？」

「いずれ解る……」

その言葉を最後に全てが闇に解けた。

気がついたら学校の校庭に居た。

「あ……れ??」

どん、といきなり肩にぶつかった奴がいた。

——ムカツク

(あいつ……知らない。)

そう思ったとき、そいつは倒れた。

皆があわてている。

そいつは救急車で運ばれていった。

そして……まもなく死亡したそうだ。

——マサカ……

私はたまたま通りかかった人に声をかけた。

「……おかねちょーだい」

そうしたらその人は自分の財布から数枚の札を渡した。

「ふふふふふふ、これよ！あたしの求めていたものは……！すべて、あたしの思い通りになる力よ……！」

あたしの思い通りになる。

あたしは『知らないもの』は『すてて』、『ほしいもの』だけの世界で過ごした。

何もかもがあたしの思い通りに……何もかもが……！！

「……たのしかった??」

そいつは突然現れた。

あたしにガラス玉をくれた男の子。

「ええ、あなたのおかげでねえ。でもあんたも……もおいらないやあ……きえて……！」

変化が無い

「どうして！きえてよ！はやく……！」

どう……して??

「……まだ……気付かない??……ここが、夢だってこと。」

「え??」

「……あんたの願いは……『自分の思い通りになる世界』だった……??」

「……。」

あっている

「……だから、思い通りになる世界……すなわち……夢の世界に入ってもらった。」

——ナニヨソレ

「……はつきり言って、あんたみたいな奴……嫌いなんだよ？……もう、二度と……会いたくなかった。」

「な、なら来なきゃいいじゃない!!」

「……そうも……いけないんだ。まだ、代償をもらっていないからね。」

「だい、しょう??」

——エ?

「……こちらも、ボランティアで、やっているわけじゃないから……。代償、もらいに来たんだよ。……あんたの場合、願いが大きい過ぎる上に、大量に水晶を……割っちゃったからな。……そうでなきゃ……わざわざ出向かなくても、良かったのに。」

「そ、そのだいしょうって……なに？」

「……言ったら、……面白くない……だろう??」

にやりと楽しそうに笑い男の子がそういった瞬間。あたりが闇に包まれた。

私はあの後、義母と義父に言ったとおり、しばらくホテルのようなどころに泊まり、その後、アパートに引っ越した。

「学校からは少し時間がかかるけど、虐待も受けずにすむし、それより何より、なんか……」

一人暮らして自由な感じだなあ

時々寂しくはなるけど、それ以外は不自由ない。ご近所さんもいい人だし。

あの日からいろいろ変わった。

いまだに私は何を得て、何を奪われたか解らないけれど……それでも前向きに生きている。

「あ、そうだ!!」

よらないといけないうところが……
向かった先は……

夢願堂

「あ、中条さん。」

声をかけてきたのは月音だ。

「どうしたんですか？」

「お礼を言おうと思って。」

「あ、じゃあ叶夢を呼んでくる」

月音は店の奥に入り、まもなく出てきた。

「ああ、貴女は……」

叶夢は月音に手を引かれて出てきた。

「あ、あの、ありがとう！」

「はい??」

叶夢は何がなんだか解らないというようにきょとんとしている。

「あなたのおかげで、メイに勝てた……だから……」

「……おかげも何も……これが俺らの……仕事だから……礼を言われる……筋合いは……ない、な……」

「え??」

「代償は……もらったし、あんたの願いは……もうかなえた。……願いをかなえ、代償を……もらうのが……俺の仕事だから。」

叶夢はきっぱりといった。

「だから、礼はいらない。」

「……なら、私が得たものと失ったものをおしえて。」

「……得たものは、……おそらくはその『メイという人に勝つ力』、失ったものは……知らないよ」

「……そう」

私はそのまま、夢願堂を後にした。

数日後

アレから平凡な毎日が過ぎていった。

メイは今は、精神病棟にいる。

幻のようなものが見えたり、いきなり耳が聞こえなくなったりと
しているらしい。一体メイに何があったのだろうか。

そして……さらに数日後、苦しみながらメイは死んだ。

彼女は死ぬ前に『ムガンドウ、ガ……』といていた。

おそらく、あそこで願いをかなえてもらった『代償』がアレなの
だろう。

そして私はもう一度、夢願堂に訪れた。

「へえ、そんな……ことが？」

叶夢の瞳は相変わらず此の世のものではない何かを見ているよう
だった。

そして、メイのことを話すと口元にくだらなことをあざ笑うか
のような笑みを浮かべた。

「ええ、……来たよ。……願いをかなえろと……ね。」

「それで、どうなったの？」

私は叶夢に詰め寄った。

「大きな願いだった。……だから代償も大きかった。……欲に身を
……滅ぼされた。」

無感情な声で言った叶夢はそこで言葉を切るとまっすぐ私を見た。
「どちらにしろ……あなたには関係のないことですよ？」

ふっ、とまた、あざ笑うかのような笑みを彼は浮かべる。

そう……

そうなのだ……

私には……

——カンケイナイ

「そうね。かんけいないことね」

思ったより、私の声は軽く、たわいのない噂話をしているようだ
った。

中条御幸の得たもの、『全てを告白する“勇気”』。失ったもの、『甘さという“優しさ”』

神崎メイの得たもの、『全て思い通りになる“世界”』。失ったもの、『神崎メイの“すべて”』主に『彼女に対する“愛情”』

今回の報酬はこれだけか。

まあ、いつもより多いからいいとするかな。

さて次の獲物は一体誰かな？

少年はくすくすと楽しそうに笑うと闇へと消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5425t/>

夢願堂

2011年5月30日10時55分発行